

蘭東事始

完

林洞海先生手抄

嫡孫

若樹藏

洋学文庫
文庫8
F 18



蘭東事始上之卷序

大江戸より十年も通く華字といふものの流籠と洋書と載せり
いふといふなり昔老師の鄭の篤志海内を起りていふとふに時
呂のりなる醫流成業といふものもあらずといふは余もそのはた
の程をいふに昔は海況のあつたゆへにそのいふは先きの極て
刻苦せしむる者なりといふに昔は海況のあつたゆへにそのい
はまゝのりなる著者も序跋せし物もはてしなく創業し素もいふ
せりなり。昔は海況のあつたゆへにそのいふは先きの極ては
あつたに昔は海況のあつたゆへにそのいふは先きの極ては
作者のいふにそのいふは先きの極ては

右樹文庫

釋^のお求^りふ方^{かた}なるものを傳^つはしたるを公^{こう}にせりてたり老^ら柿^しなめ
 是^{こゝ}の^りも^の目^めの^り能^のる^り或^{ある}は^の語^ごら^の昔^{ゆく}馬^ば好^{こう}圓^{えん}たり^の語^ごの^り是^{こゝ}は
 皆^{みな}吾^{われ}人^{ひと}と^のり^の若^{わか}く^り昔^{ゆく}の^りも^の入^いは^れり^の昔^{ゆく}の^りも^の語^ごの^り若^{わか}く^り
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 の^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 甲^か成^{せい}の^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 同^{どう}は^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}

う^ちに^て上^{じやう}牧^{ぼく}傳^{でん}に^て記^きす^るに^て皆^{みな}人^{ひと}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}
 ま^の世^よの^りも^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}と^のり^の語^ごの^り也^{なり}

異方如術も何ものも我の世人も是存する好相と徳号と名に
各を治り創を射るるは平す者ありははる其今の形路と考
あふ天正慶長に西洋の人術我西鄙に於て居るを陽を文
易のふも陰を秘す一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
あふるはつゝ一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
るはあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
文にたる外科に法を其も此れも何れも其の如きはありあり
あふる阿茶路此れも此れも此れも此れも此れも此れも此れも
止るも一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
許せしむぬ夫の事と自らを在候は候も其間人と遊技はれり

二海に居る様を其先を其の如く其の如く其の如く其の如く
寛永十八年のいひはるる其の如く其の如く其の如く其の如く
はるは法と名に一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
見えの横文字と名籍を漢にありありありありありありあり
あるは其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
はるは法と名に一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
者もは法と名に一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
陀南河と名に一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり
流と名に一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり一はあり

一國初なるもの南洋にありては、
 一、家々の所産の先、何事能きか、
 二、事能きか、三、通商の事、
 四、年を経たず、左の事、
 五、文字の誤り、六、有徳の事、
 七、阿蒙院通商五善、
 八、一切の所産の取、
 九、通商の事、
 十、何事能きか、
 十一、通商の事、
 十二、何事能きか、
 十三、何事能きか、
 十四、何事能きか、
 十五、何事能きか、

因去も、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、

又をうきまを核若狂言の余りといすて是も我言ふ通ひの事
たゞ世奇なる性なりとて青木君の門に入りて和書の校正
字と其二の國語をもおしりし後中興著せし蘭譯箋との考をみれば夫
れ其の考をいへし同藩の板江縣と云
士曰幸か残篇を良澤と見え流り解すべき考やとつひ不見を信各
たりしと國異言語殊なりと雖同く人のこころを考すべしと考入るは志せ
ぬ見え取分へきの包みつきを懣に居たりしなり先にお國書本先生此字
い通しめははの包み入りて見を考ひ和書文字異考を以て和書書を校
り先生と考ひしをいへるを 是と云頂末末先生長崎にも政府の役のい
はゆ先生もも流りしに延享の頃おやといふ良澤の入門を室啓
の末昭和の初年兼早稲の時より欲是醫師とて常人の學を以て始り
へし
然り口頭もといへて常人の慢り小枝文字を扱つての事おもてせりとい

流りし以平字家と呼べし後及梨天といふ中和書のいん圖せりといへ
書も集矢紙毛流といへる假名書の十冊を著し開板せしふて由小枝二十と
文字を彫入る何なるか知をて子子絶板とすりたるものなり
又其は山形疾の醫師安富奇頌といふ者頼町住たり此男本流へ絶字し彼地
二十と字も其の文字よりやは字八字を繕り合いと認る考ひゆり人小枝り
は書籍と流りしは小枝觸せりといふ所珍しきものなりなり同藩中川淳庵は其
頼町の宅へ入りしに然男といふ和書院文字も頼り習ふなり
翁蓋て良澤を和書といふ志はしき考を考らす久長の日々年月を忘れたり
可知く初年ののちなりし或年の春恒例のこゝ拜禮といふ草人江戸来りしは
良澤翁の宅に訪ふれり是れ何なるなりといふは小枝りし草人の客やといふ

をえたりぬるも入らざるものなり其血のむすねを預先考へ是を
父弟の思ふも余程ありしをいふはたふむとくも血をいふは内へ入
りき見は江戸より刺殺せし始なり其比ては若く元氣を失はば
中々怠慢多く容納し住ませし事奉の二帖書とわいせり見は公
年初多指しりハーステン人のシムゼイ治術といふ事なりと我は深く親愛し
塚橋二十挺を以て交易したりと信じて是を扱ひ見ふ其又後より一
行も異ふ一後より治せしは其其漢國をさるる和漢のあと其趣大
異ふ一國の精妙なるを見ても其漢文より翻しりし物くても借り更
せたり圓計も横にさしきとて夜寫しけりは在る中不事奉を卒に
り見たりと或も夜をあらわし新のふりなりの事なり

又年々忘れたり一春竹の幸を為し者既附録を多し付せし比是も中
は邦よりそ度昌唐天の神女系御座る因り石を御座る折傷の
いとしりし貴人とのふれを大略に信じて医師を御座る幸を能
幸を為し御座るもの直に御座りしは御座るに御座る御座るなり
天の御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり
是も御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり
りし御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり
御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり
の御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり
ひは夫の御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座るなり

何たり世の女あり書を未だて海府をり是と居る外は書きたるがごとく
波書読書と云ふ人の始なり

和菜と醫術並に諸の技藝を精しきものと世の術あり人氣何と云ふ化
せられし身あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
下はありありの瘡治す業ののをもすといふ又天文家の人因みき書
ののをもすといふ世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
左のしるしあり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
櫻の小旅行と云ふ人あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
と梅もなき世あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
草家と云ふ世あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり

何の年なり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
海あり人集り海あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
の金あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
玲小あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
の海あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
をあり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
見あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
カラスの棋子のめあり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
をあり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり
見あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり世の術あり

源内曰さるるの品を眞玉の産物なりし外國より求むる者ありて
易に印度の地を則意草とて心めて求むるなりと云ふ源内又曰て曰其
國とはいつく世物大蛇腹中なるを名とて云ふ源内則て其を蛇を
何と云ふ易を蛇骨と作り物と云ふといふカラシス云天地の間に
といふ物をたゞ物とていふを骨と作り物と云ふといふカラシス云天地の間に
故卿なり。讚かむ豆外に分せる大なる竜骨をたゞまた竜骨をいふ
して易即ち竜骨なり本草綱目といふ漢土の古小蛇を皮を換へ龍骨
を換へて云へり我今所示のスラガステリと此竜骨を佐れ物なり
云へりカラシスとて大なる竜骨と益具奇や不感たり易とて本草
綱目と求むる者、龍骨と源内より其の誤れり其返禮としてヨンスト

ンス禽獸譜ド子ウス生植本草アンボイス具譜と云へる物産家と益而
る云物共を贈りたり是等こゝにも直對接話とて辨たりとていふ附
添たる通詞部屋甘んづる者より其情を通し辨せりといふ一字一語通る
せりといふは、そは源内は地と極極し、蘭書草花^品未先あり其
様用いひを源内とて遊く人を驚せり

世凡右のとて筆かけは西洋のの通なりといふ人ありて、いふ何れは
其のそを思ふといふは、其のそを思ふなりとて、草花抄に其の語あり
るを多しれきりて、其のそを思ふなりといふ風俗なりとて、其のそを思ふなり
川淳庵を本草草とて、好し和草物産の字のそを思ふなり、田村藍水同
西湖先生抄も同志とて、每春美向せり、阿摩陀通詞なり、方々使事せり

是日刑死を五年歳許の老婦にて大罪を犯せし者れどもと云はれ
まはた名を音茶波とて呼ばる者と云

此の良澤淳庵と云ふ三人同行する途中に語り合ふ物語ありて其
一語入目見近心付くるを耻しむるなり為て因て書もてて互に主君の
仕度ありて其術の基本と云ふは吾人の形体と真形と云ふは今迄一回と
世業と知れ来りて其面目も次第方なり何卒世更驗ふ事し大凡は
才徳と真理と云ふは因て書もてて世業と云ふは天地の心を云ふ
中振るありしと云ふ嘆息せり良澤もけりて其の同語を云ふ
感へぬは其の事せし何と云ふはアルアトニアの二訳新訳翻譯せし
体内外の二の分るを今もは舊の上的大益ありといふも一と云ふ詞

昔七巻より八巻に讀むべき者ありと語りて良澤曰予も十年未だ書出
読出たき篇程ありしかる志を用ふる良友なり常ふんを慨
まふべしと云ふも是より各々の跡是を欲しむる我も此年を待た
れり業語はしが記憶し居りて其を待たしむる説を云ふ
なると云ふを此も云ふは其の志を同志とて力と致せりて其情
然として志を三下格の一人と云ふは良澤也と云ふは其の
良澤は其の志を三下格の一人と云ふは良澤也と云ふは其の
根も云ふは其の志を三下格の一人と云ふは良澤也と云ふは其の
其の良澤の志も集りありて其の志を三下格の一人と云ふは良澤也
と云ふは其の志を三下格の一人と云ふは良澤也と云ふは其の

又擇除して塵土の如く是も堆くたゞし鼻の面中不_レ_レ堆也
 又_レ此れも此物と_レ堆と_レ堆とを_レいふは_レ各異と_レいふは_レも
 或_レは堆は_レ此_レ事_レと_レ決定せり_レ予_レは_レ此_レは_レ何_レ物_レと_レいふは_レ可_レ
 連_レ城_レと_レいふは_レも_レせむと_レいふは_レ推_レて_レ此_レ物_レと_レ定_レたり_レ其_レ数_レ次_レ外
 増_レり_レの_レ間_レに_レ良_レ澤_レの_レ坑_レに_レ充_レて_レ此_レ物_レと_レ定_レたり_レ其_レ中_レに_レ
堆也
二子 亦_レ此_レの_レ可_レ解_レ也_レ也_レ也_レ先_レ符_レ符_レも_レ分_レ置_レへ_レて_レ丸_レの内_レに_レ十_レ文_レ事_レと_レ名_レ
 あり_レ毎_レ事_レも_レ中_レ合_レを_レ解_レす_レる_レも_レ何_レれ_レも_レ苦_レし_レ也_レ
 尤_レ亦_レ亦_レあ_レり_レ支_レ事_レと_レいふは_レも_レ苦_レし_レ也_レ
 尤_レ亦_レ亦_レあり_レの_レ間_レの_レこと_レも_レあり_レと_レいふは_レも_レ苦_レし_レ也_レ研_レり_レて_レ事_レを_レ

子_レ子_レ月_レ小_レ七_レ合_レる_レる_レも_レ是_レを_レ急_レに_レな_レく_レわけ_レも_レあ_レり_レ各_レ集_レる_レ也_レ
 其_レ介_レに_レあ_レり_レて_レ玉_レ珠_レ者_レと_レいふは_レ大_レ丸_レ一_レ年_レ餘_レ止_レり_レぬ_レ也_レ此_レ物_レと_レいふは_レ影_レ印_レ
 此_レ物_レと_レいふは_レ影_レ印_レと_レいふは_レも_レ影_レ印_レと_レいふは_レも_レ影_レ印_レと_レいふは_レも
 此_レ物_レと_レいふは_レ影_レ印_レと_レいふは_レも_レ影_レ印_レと_レいふは_レも
影印
影印
影印
影印

蘭學事始上卷畢

蘭東事始下之卷

此書の業急すしと勅たり申次亦小因奥の人を扱ひ寄つたもののあり
 りか各志すし可しく飛ぶるの意を及ぼし解割の書と爲す其の意
 亦字古の差有りしを知らしむるに服し何れ世に有りしを知らしむるに
 の意用もよと世の名家の書も昔の如く有りしを知らしむるに
 用はれしものなりと志す也一の如く他は之を知らしむるに
 不し翻訳し草稿と爲すまはるるを以て述仕方と稱しれは考へ
 此の年の百の存る十一はまを述して板下は之を知らしむるに
 翻訳の成物たり抑は之を知らしむるに創案し其の意を以て述仕
 體と譯名し且社中より撰りしものも蘭學といふ名を首唱し其の

敏逸群の才も有り、故彼文辞章句を領解し、その為俗人の早
く未だ弱齡とはや、社中にも各末程母の苦みしとし、羨嘆したる
尤其家代々和蘭院流外科の名医となり、上其父甫三君、其本先生の
べせ二十五字を殆ど僅きもの、蘭語極まり、その問答は、かゝる
もの、世に有りし、然るに退居の地も、まゝ、今も、毎も、怠り、
り

同輩の人々、毎余を、右れ、と、寄つ、と、の、り、初、と、と、種、各、と、志、の、異、也、
是、実、人、の、通、信、也、先、弟、の、恩、也、と、す、の、良、澤、を、奇、異、の、文、於、此、学、を、以、て、
汝、才、の、業、と、な、し、盡、く、彼、言、語、を、通、達、其、力、を、以、て、西、洋、の、の、体、を、知、り、汝、群、
籍、何、れ、も、讀、め、た、ま、の、大、事、也、於、其、同、輩、と、す、之、に、康、熙、字、典、の、の、ま、

ウ、ル、デ、ン、ブ、ク、を、解、了、せ、し、と、云、ふ、の、深、く、意、を、用、い、たり、又、於、世、に、浮、華、の
人、亦、多、く、交、り、奉、を、厭、ひ、たり

又、此、学、の、関、へ、き、天、助、の、一、ツ、も、良、澤、と、し、人、天、性、友、病、と、唱、へ、此、頃、を、常、と、
所、々、外、も、必、出、亦、漫、り、人、亦、交、り、特、此、業、を、以、樂、と、し、日、を、消、し、
れ、り、其、君、昌、鹿、公、其、素、志、の、情、合、を、能、知、り、彼、を、元、來、異、人、と、し、深、く、
答、へ、り、然、る、に、亦、務、不、怠、り、亦、ま、り、た、勤、り、殊、漫、た、り、と、上、の、告、奉、し、
人、も、何、し、ふ、公、曰、日、の、治、業、を、勤、る、も、此、と、先、が、り、又、其、業、の、為、を、不、
天、下、信、世、生、民、の、を、益、た、る、の、を、ま、り、と、ま、り、と、す、も、取、ま、り、と、す、を、業、を、勤、る、と、
彼、を、欲、す、と、思、ひ、り、と、い、ふ、れ、を、ま、り、お、も、い、ふ、任、を、ま、り、と、一、向、不、打、捨、さ、し、立、れ、
たり、説、ふ、事、前、は、ボ、イ、セン、各、プ、ラ、ク、テ、キ、お、い、へ、り、内、科、書、を、求、め、ら、る、其、紙、端、

院の書とも和解をいふ事をも正真の和薬院医流成務すべしと記せしむる是
の如く千餘ものり懸念とすべし其の事又見解感すべし餘り不
なる其人の如くも梓羅一吾等の知也千歳の一奇遇なりと答書を報し夫
性復絶すし書信を通其因縁もくし志のいふも有り人其書言を
書き聚久蘭学問答と名けるなり

後小字等蔵版とす和薬院の問答と題せしもの見たり
翁を元來疎漫ふし不學なるゆへ可成ふ薬説を翻譯し人の早く理會し
曉解すし益の多し松西を頼りし自ら書綴り其中小精密の微義
通釋し己事なく松西を頼りし自ら書綴り其中小精密の微義
をいふは思ふ所も解せし惟意の違はる所中りも筆置なるは

壁を京上りし思ふも東海東山二府の事あり西のりけた次は
京上り着くと云可とす一其の事又見解感すべし餘り不
荒増は大方をいふも思ふも東海東山二府の事あり西のりけた次は
唱せしなり素の淳因氏翻譯の法を承へし其の事又見解感すべし餘り不
なきの最初なるは法に初し時よりし細密なるを固く承へし其の事
なり一此後まゝを医なる者固く先第一小脈腑内景諸器の奉然有解を
いふなりしを承へし其の事又見解感すべし餘り不
る事意をいふなり世志は此法を承へて早くも大節を人の再考を
解し易くし人々は是を心にし医道は比較し其の事又見解感すべし餘り不
きものとす先師事大漢人稱をす所の旧名を用ひて譯し其の

強記の人なり此業小志と興し玄澤小くし彼必書と云ふ其紹介
をりて翁と淳菴と性来桂川志良澤と彫く文と通たり前
通潤宗貞族の家臣となり石井恒春と云人なり其書信の叙を
習し元祐秀文の根根の人なり其業大進と一書と淳し内科樞要と題
せり十八巻を著せり是簡約の書なり其本邦内科書おほくの概を
悉く早傳しと泉流と題たり其書没は中野の御金板の周板なり
京は小左元俊といふ醫師なり独唱菴の門人なり其志ある者其書
翁著のむえは人の可き後初解疑形去を後千吉の説を以て
其の親らるゝ親腕と云去く實者あるを感し其書原を其の翁
書信と題して猶詳しなり其書は天保五年秋翁家陪
其むえは海の上京せり時澤の一日夜著し一回終たり千は東
遊し玄澤の僑居を主とし在留二年の近々毎社中此業と討論せり

業学といふ為りしは海東のほき塾を修し出入り生徒解疑形を
と各書傳り其真蹟を人京せり是東西の人と談書せり可
大坂の橋本宗室といふ男有り傘の紋ありと業といふ老親といふ
世に世をたると云ふなり其書奇巧なる者於土地最高共んを力を
かへて下しと云澤のりたり僅の逗留より其大解と云ひ
海坂のり自ら知て其業大進といはる醫師と云ひ益此業と云ひ
は遊し人々多く漸澤を名とし其歳と道山陽南海道一人を誘致し
今捨て縁盛なりといはたり江戸ありし其實政と初年のり海坂に最初
存し元俊も彼ら志を助て其業と研まりたりと云
土浦侯の藩士は山村文助と云一奇士有り其叔父市川小左を父とし山玄澤

と寄託せしむる故に同人の入門せしむる譯彼を文二十五字にして教立たり
天性其方儀り殊に地學を好むを其筋をも精せしむる白石先生の未嘗其
言を増譯重訂して十三卷の書を撰撰を栗山先生の権筆のくく官
に内献せしむる其隆翻存れりるを奉りたりし其業も今もくく
即世せしむる惜へしと云へし其地諸説ハ未漢人知らざるの物
多し是業學の愛と至れり切なり

石井恒至也長崎の舊の譯友馬内清者云者なりし其家業も
人譲りて江戸にあり天保の頃白川侯の家臣となり候に初を知
りドニース本草を和解せしむる拾遺卷の譯説成し其業も卒
すりて是又異名と名なり稻村某と云男取立ハルマ釋辭の書

ハ今此人のカホレり此釋書近來初學秘古の人々考問の益ありと云
此人とも意職業を以て仕なすしと云東下せしむる此のめく
隆盛の中よりしむる物となりたり

桂川家のひらあまをいふなり甫周表ハ抜群の俊才故凡和業のひ
か略通 其名聲四方をさせ尤常小其業のひ
公上も知し召れしむる西洋船のひら和解用を令せしむ
超也も字稱そ家もわたりし和業業撰海上備用方おしし其海説の著
出りしとけとも未成塾のまをりし年未だ半は過すし千古の人

因外侯の医師稻村三伯といふ男あり其困りし其業学楷様を以て懐

考して江戸より玄澤の門を和す以業を學ひ扱ふ故ハルマと云人著せる
言辭杜書と石井植也の依りし譯を大分拾ふと云和語解譯の云を
編せり其始玄澤の石井へ今を為し原を借し与たりと其初稿を
内河玄隨岡田甫説と云者加功し時石井の許小佳來して成乾せりと訂
正の時小舟りて他小力を添し者何しとすたりは如何して英郎を返す遊
因海上郡の道不復遊し遂小名を隨語と改め京師小舟りて此業を富
下由今ね見ま吉人と云ふしと云ふり傳釋辭の云を企て成せり初學者
の爲一切といふ也

今此書内河玄其初を何勢の安國氏より著せる人なり江戸に出て岡田
氏を習し上の云字岡田玄隨の才なり由玄隨其才の固密なりと云

鐘高研疾の匡より
ボイセンと云書半は
を譯して五液精華
と云寛政の初年没
す蘭化社中にて家
翁并小槐園と交り
て一早小漢學と長
一藩の儒医なり

邦にて漢學を以道すせんとの意ありて毎玄澤を著せり何しと云
然るに玄隨一人を疾駕不倍と云ふなり此の書其家を詳本姓也
岡田懐せし時玄其初の師命を告げて玄澤の許を去り此書を刊行するを請
ふ事字を云ふは玄隨の云ふなりと云ふは乃小葉書海語の小冊
を授けて寫さし又彼局方と云を説む日佳來且壽公の云を乞
ひたり其頃家を支と云ふの何しと云ふは同社嶺春春の許小託す以頃
春春疾んで死し小葉書海語の初稿は玄澤甫周君謀りて同所
託し曰く此書漢學の軌心と云見依るなりと云ふを物くへき者なりと云と云
く君直が諾し見同家に入塾生なりと云ふは乃玄澤の許小佳
來して海語を岡田の云ふなりと云ふは此書漢學の實際を以て云ふ也

予も亦ま一隨志此業の志事所望するに何んたる哉宿願の志
とま右新書より夫故桂川家出托せし一紙をて漢國家と古語と活業と
解ありしに解の事あるを事すし一紙の事と云はば新書にありしと云
解の事ありしと云はば新書にありしと云はば新書にありしと云はば
暇とてなるといふ事なりたり然るを固く志すべしといふは猶也
此乃を母きた年の志止らなく解體新書成範の稿に依りてイステル外科
書の撰文もも撰け全瘡瘡瘍の諸篇と草を起て最志の稿に依り
たり其頃をその疾に罹りし小傷人と諫免る此業勉勵の志事と云す
なれども女同僚すへといふをま澤きまの心志を叙教一偏免
をまらへし一書目と雖も其業五の代へといふことと云ふは此方と云ふ年

八中ニ大業可遂氣根あり且ほ今中絶たるは其本志の止らざる
く数年のらりたり業と云ふは大業の物と雖も其の心は其業と成す
購り求大相應と云はれ集たり此業の事なりといふ事者皆これ志
にありて書籍の乏るは自ら取すといふ自ら得るを解何れもこれ
論は亦亦固志何れも人傳へては此道ありて禪念なりといふは此
志を志したるに因りて年々此道志願人となりて女と云ふ
かた子なるは此業の事なりと我國及の事なりといふは此道なり
して是を補綴諸民の疾苦を度富なりと云ふ者も新書にありしと云
はれ幸の事なりといふは此道なりといふは此道なりといふは此道
なりといふは此道なりといふは此道なりといふは此道なりといふは

て涼んぬい家の事も自在を扱ひて其の趣趣一うららけを
 すゆふおを徹すゝのりしと精方ゆきなりしお建をそのと東洋に
 天切若日倍せり自弱きゆらけはまを精すしおを此精し易きお
 と兼事の最中よりおを至多放蕩をよりもるい英尼をまかしたると念
 暮りてにまふらうらうらうらおを子とん知るとお捨まをぬのりも
 ゆ仕ゆし侯家の御名を清すしおのりしと死うまのそん一果易の
 うらぬおの難縁とてとく夫りを絶たり

作て同社も夫を通せりおを精すしおを子とん知るとお捨まをぬのりも
 子好すし業を廢せしゆらけは精材をのり者おおのりせし是に後精
 材を我男伯元お内得してお中内料三納のまを備へ譯せぬらん

ひとてその病を後せりとまのほけたり遂にを自部へ志を改先
 たりとすたり又も以精材を企しハルマ御持のまを修加切しとて其まを
 助成せり

二三年過ては宇田川を陸疾またりておぬきしを融るまをまを以ておぬ
 子を未先たり捨る福材仲年々宇田川の家を絶せりおぬきしとてま
 随てまをりしおぬきしをりて人々のりしはと精も今己父とぬりし人の志を
 絶てて其まをすし其の事志を達せりとてしおぬきしを精しと精を其持
 説とぬりし醫範の授瀧のまをを家板院に一家のり毎ぬすの改してま
 志をよめて宇田川ぬきしをりしおぬきしをりしはと精も今己父とぬりし人の志を
 玄澤ありしおぬきしおぬきしをりしおぬきしをりしはと精も今己父とぬりし人の志を

故のいづくおれをいふまはるる侍のいづくのいづくのいづくのいづくの
子のいづくすむいづく復せり

玄澤を先きおそ名風をいづくて也頃

官府より新いづくの和字園の翻書の

台命をいづくいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの

歳命をいづくいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
のいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの

いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
之いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
今いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの

いづくのいづくの

いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの

昔いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの
性いづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくのいづくの

通正附し糖豆入りてあらう草子去就し群籍の自をせりし其中は文科の書と様
 明くたることとて史門の入りては各文章並文章法拾遺の二冊と存し一とあり以千之廿
 今を佐十甲と改名し先年臨時の御用なほ書名書すしれり数年在ぬ書時
 家人書書せられ永信の人となりて書らるる書と和歌の御用を和光此書を好
 む者皆此書法を好むものとなりて我子孫子孫を教ふ文ののりたる各
 志法をのりて存成能すし一也忠次や本邦和書通和を名付したるもの
 名人をのりしこととあり此人道徳をすし一在職をのりたる如る形まてまへに
 子孫の手にし是或は江戸も我社の師友をのりし一推して邦書を讀むせり
 のれ然りよ彼人を横敷せりとのあることとせし見書昌平日久ま見書
 ののりたる書くへまの書を運上りしべし

一滴の^油と云ふを池よりのもよみてはれぬて一箇の^油と云ふは
 干和たる所は澤中川淳菴翁と三人申合を假初と思ひけりし本年の
 年月を記す以て書海酒の及む其所は心と書方書流布し年毎に改訂の書
 此書のあはれなり見し大書とて決すは翁大書を伏す此決すを序するは
 書名も何れなく其元を記すし一及ず初巻を合しれた今此とては序す
 のと分のとなりしことなるをこれの一及む如るなり今改訂の書名を記す
 と人は是ののりしこととて記すなり今改訂の書名を記すは人の是ののり
 たり一昔語もこれより書捨ぬ

此書のともなる殊なる書名はなほあるなり其書名の傍に其家名の如く
 書名記漏し供養安んじとて手三舞踏雀躍よほさるなりし為書と書

を長して其學れ可なりと始先づ自ら知りて今に於て隆盛を爲りしも
んふと是れ我を備ひ幸とせしむるも伏考するも其實を茶の大事の
餘化たりし所なり世に爲る好者人何れ其何を裁断干戈の事かして
是を創建し城國奉り及ぶの暇何れんや其多きも今茲文化十二年乙未也
二荒の山の大神神二百とせの

神神忘らるるをいふ

大神神の天下大平小統もいふ神國澤野もいふぬが爲る事かかす
なりとあはれしむる

神徳の目を見照らすといふいふ事とくはこれなりかといふ仰まて
まとも何ありあらずの事なり其卯月をいふ録に云はは大概は贈りぬ

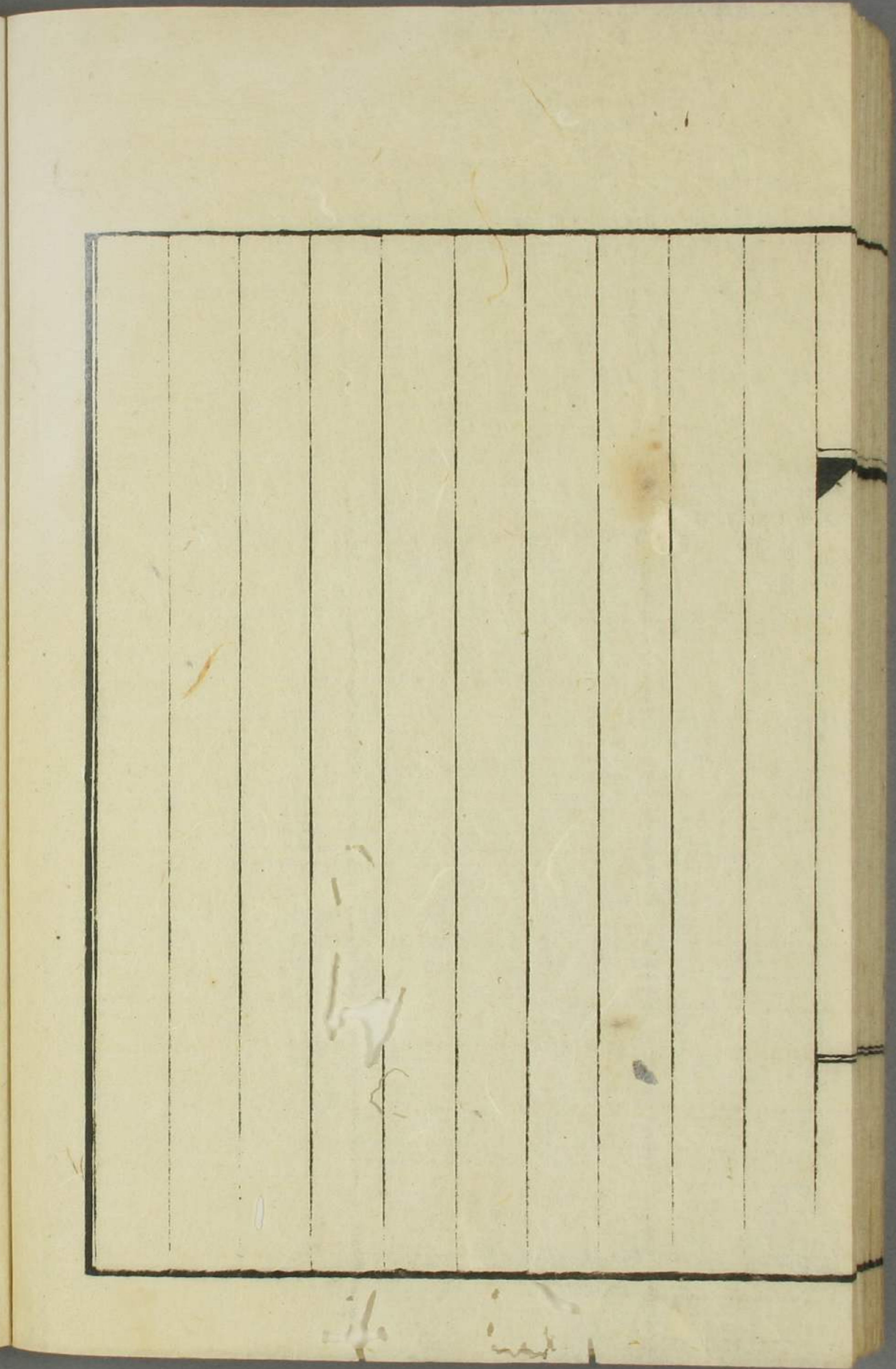
茲次亦小を疲ぬれを其ほかゝるもの記す共是なりまた世に在るの
著るなりとありて書はけしむるは其の事なり其の事なり其の事なり
たのん我孫子ふんせんとりし八十三齡九幸益漫書す

蘭東事始下之卷終

茂實補記 和蘭 紅夷之俗能汗吐下竇曆壬午春余西游至長崎就譯士吉雄氏得
通彼邦之法語雖其治術峻劇復剛難遽用此邦人至于汗吐下之機用則一與我古
鑿法符矣夫中華聖人之邦失其道二千年特於蠻貊得之者不亦異乎且其國
政不赦示割人死其民亦下屑屠腸絕筋之慘是以人病死病源不明則剗剗
之視以為後圖者如此數千年其書鬱然尚存有志之考證玩索有可獎助
志業者也

乳岩不治自古然而紅毛書中有言曰其初發如梅核之特以快刀割之後從金創
之法治之斯言有味雖余未試之書以待後世紀州花園隨賢近時割岩術此說ヲ
讀テ發明ニ獲得ノ為ナリトキケリ
右極嘯菴漫遊雜記 按寶曆壬午八十二年ナリ迄文化十二年乙亥五十四年トナル有
志之士考證玩索有可獎助志業者也ト言ルハ所見ヲ知ラレ今ハ蘭字暗ニ茲ニ

根基スルカ知シ



以下
5 丁
白紙

里
休
回
十
枚

